様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2014～2019
課題番号：２６２８４０８７

研究課題名（和文）生存のための読み書き能力の比較社会史研究

研究課題名（英文）A Comparative Study of Social History on the Literacy for Human Lives

研究代表者
本村　凌二（Motomura, Ryoji）

東京大学・大学院総合文化研究科・名誉教授

研究者番号：４０１４７８８０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　12,200,000円

研究成果の概要（和文）：生存のための養生訓や医療教育について、古代ローマと大江戸日本、ギリシア古典期と唐代中国、近代における本国と植民地等を事例としてとりあげ、それらの比較社会史的な分析を試みた。ローマと江戸については、世界史の中で浄水意識が際立って高いことを確認しながら、それらの訓戒の伝授の仕方を分析した。またギリシアと唐にあっては、西洋医学と東洋医学のそれぞれの伝授・教育について、民衆の識字率との関連で伝統の継承の歴史的背景を明確にした。
学際研究教育プログラムのテキストマイニングを行い論文を公開した。また16~19世紀のスペイン植民地帝国における文書管理実践に関する共同研究の成果をインターネット上に可視化した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　いかに読み書き能力が普及しているかということは、人間の生存の条件を大きく左右する。この事実について検証することにより、とりわけ身体保全と衛生観念が文書として管理されていることの必要性を強調することができた。それらの知識が固定されておらず、疫病や感染症などを機に、再検討され、新たな慣習や制度を生むという歴史的・社会的意義が明らかになった。
　ICTを積極的に活用しながら学術研究におけるデータ収集、分析、成果の公開の方法を実践的に考え、成果の公開も行うことができた。これらの作業は、大学等の高等教育の現場においても活用可能である。

研究成果の概要（英文）：We carried out our project that we should make a comparative study of social history on the literacy in lessons of self-control and medical education for human lives, treating several cases (1) ancient Rome and Japanese Edo period, (2) classical Greece and Chinese Tang period, and (3) home countries and colonies in modern times. For example, confirming a striking consciousness of water purified on ancient Rome and Japanese Edo, we made an analyze on how to induct lessons of their ideas.
We carried out text mining and visualization of an interdisciplinary research and education program on cultural resources studies in collaboration with information scientists and analyzed the relations between a university, an academic association and the practitioners' institutions. Furthermore, we analyzed the achievements of a collaborative research on the history of the Spanish Colonial Empire and we wrote an academic paper in Internet for an anthology of the collaborative research.

研究分野：古代ローマ史

キーワード：史学　比較史　識字率　通時的研究　読み書き能力

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（１）世界共通語である英語におけるアルファベット文字の歴史は、かなり古くから、ヨーロッパやアメリカにて研究が進められており、すでに文献や研究資料も大量に保存されている。しかし、アルファベット文字の発生より前の古代文字やその他の言語においては、個々の言語の発生から歴史的背景などの影響を受けながら進化を遂げた言語については文献、資料から読み解くこともできるが、現代のさらに進化し続けていく情報化社会へとつながっていった言語の問題へとつながる研究はほとんどみられない。または各言語の発生源からの派生語への変化の歴史的な研究と現代への影響における問題点と課題の重要性については、ほとんど分野として開拓されておらず、早急に取り組み、解決策を導くことで多様性をもった論点を明確化しながら考察する。

（２）さらに、急激な技術革新を受けてリテラシーが世界規模で激変する状況において、学術研究と高等教育は人類の生存とリテラシーの未来にとって、極めて重要な役割を担っている。それゆえ、ICT を積極的に活用しながらデータ収集、分析、成果の公開の方法の刷新を行う必要性がある。

２．研究の目的

読み書き能力を備えることは、人間の社会と文化に多大の影響を及ぼし、とくに今日では生存に関わる問題で あることが分かっている。環境、健康、人口動態などに関する情報の理解力は「人間らしく生きる」ことの指針 となるからである。だが、これまでの実証史学はこの読み書き能力の究明にさほど熱心だったわけではない。一 地域、一時代を対象とする研究ならあっても、それだけでは問題の論点すら明確にならないうらみがある。そこ で、広く諸地域について、さらには長期間を通じて、比較社会史を試みながら、人類の生存とリテラシーをめぐる問題を考察する必要がある。

３．研究の方法

（１）古代文字から現代まで通時的な考察や、文字や文学、教育学、宗教、印刷、貿易など地域的な特色との関係性をも考察しながら、専門家の講師による研究会を研究分担者およびヨーロッパ研究者と毎年、数回の研究会を実施することができた。それぞれの文字の歴史から、様々な分野の特色もさかのぼりながら、時代的な背景の影響との関連性も考慮することと、歴史的な衰退や発展においての識字率の一進一退の状況分析もできてくる。

また毎年、欧州の出張ではおもにロンドンの西洋古典研究所附属ギリシア・ローマ研究共同図書館にて国際的評価が高いリテラシーの資料も収集できたことは、リテラシーの研究においてかなりの進展へつながる。最新の識字率の研究資料の収集においては、あらゆる歴史上の流れも把握しながらの分析作業となるためかなりの時間を掛ける必要となっている。

また古代ローマ時代における文字は、フェニキア文字、ギリシア文字など古代文字の遺跡からの調査と分析をしていく中で、歴史的な社会情勢も踏まえながら、時間的にはかなり後に発展した江戸時代との比較研究をするとかなり興味深い点があげられていった。社会史的研究へとつなげることができると同時に、国内でも地域的格差がかなりみられ、また近現代への移り変わりの激しさをも加わり、現代の情報化社会での問題点を挙げる糸口がみえてくる。

今後の文字離れからはじまり、IT 化の進化につれて起きると考えられる問題点を早期に見つけ、解決策を導くべきであり、歴史のなかの感染症の影響のなかでもこれまでも事例がある。人と人とのつながりのなか、言葉を交わす会話や文字にあらわす手紙や文学など、日常では当たり前のことがそうでなくなった時の精神的ダメージの重さに気づかされたことと思う。ひと昔にはなかったことの不便さもあるかもしれないが、いま一度、古き良き時代に戻り、実証史学のなか、なんらかの解決策を見出していく方向についても考察する。

（２）読み書きの学際的研究のための方法論の研究を、読み書きの技術的・物理的側面、特にデジタル技術と人文知の相互作用に焦点を合わせ、人文情報学の研究者と共同で進めた。人文学に基礎を置く学際的な研究・教育の展開を分析するために論文や書誌情報のデジタルデータを蓄積し、そのテキストマイニング・可視化を試みた。一つの焦点はテキストデータの分析で、基礎的な bag of words 方式の基本的な考え方、語彙の共起などを考慮に入れたより複雑な分析、それらの多次元的な分析結果の次元圧縮やその可視化の方法を検討した。また、文書の地理的分布を分析するための方法として、地理情報システム（GIS）を使った分析方法の検討を進めた。さらに、研究成果のインターネット公開も積極的に進めた。

４．研究成果

（１）古代ローマと大江戸日本ははまず人口規模が 100 万人ほどの大都市であったことで似ている。ローマでは 11 本の上水道（1335 口）がひかれ、江戸には六水道（神田上水と玉川上水）があり、七夕の井戸浚え（八百八町の大行事）は衛生観念がきわだっていたことを示唆している。

さらに、ローマの公衆浴場　は前 33 年には 170 があったのに、後 4 世紀には 956 が確認されており、880 町の大江戸には銭湯が 1 町に 1-2 軒はあったというから、いずれも世界史の脅威である。これらについて、『朝日新聞』(2020/4/23) に古代ローマと江戸期日本人の清潔志向ににについて論じておいた。また、ギリシア人とその後の西洋医学の伝承については、毎日新聞の書評として『ガレノス』および『写本の文化史』で要点を論じてある。さらにまた、本村凌二 著『教養としての「世界史」の読み方』(PHP 出版) では生存をめぐる「読み書き能力」について適宜議論の俎上にあげている。

（2）ICT を活用した読み書き・文書管理研究の一環として、学際研究教育プログラムのテキストマイニングを行い、成果を学術論文として公開した。(Yusuke Nakamura, Chikahiko Suzuki, Katsuya Masuda, Hideki Mima. 2017. “Designing Research for Monitoring Humanities-based Interdisciplinary Studies: A Case of Cultural Resources Studies (Bunkashigengaku 文化資源学) in Japan” in *Journal of the Japanese Association for Digital Humanities*, 2(1). https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjadh/2/1/2_60/_article/-char/en)。
また、16~19 世紀のスペイン植民地帝国における文書管理実践に関する共同研究の成果をインターネット上に可視化する試みを歴史研究者、地理情報研究者と共同で進め、サイトを公開した ((http://bunteku.sakura.ne.jp/hisGisMinpaku/))。さらに、論文「近代ヒスパニック世界と文書ネットワーク・システムの成立と展開」研究者の集合知と可視化の試み」を執筆した (『近代ヒスパニック世界と文書ネットワーク』(吉江貴文 (編) 出版社：悠書館、総頁数：398 頁 (327-344)、2019 年 4 月 16 日出版)。
さらに、コーディネートを務めた 2017 年度東京大学学術俯瞰講義「文化資源、文化遺産、世界遺産」OCW(UTokyoOpenCourseWare)が公開された。#4「文化資源の読み書き」、#5「文化資源と情報技術の変化」(http://ocw.u-tokyo.ac.jp/course_11400/)

（3）まず研究全体の方向性の打ち合わせをした上で、専門分野における研究者の方々を講師にむかえ、テーマにそって、様々な分野の研究者とともに問題意識や情報を共有することもできた。具体的な事例により、研究を多角的に捉えながら論議をすることで、非常に効果的で、多様性を持った研究会となった。次に、主な研究会の内容をまとめておく。

①人文学と情報学との融合の重要性について、おもに仏教学のデータベースをもとに、識字率のデジタルデータ化の基盤を考察することができた。

②アラビア文字世界としてのイスラム世界や諸社会層の社会化とリテラシーについて、社会全体の識字率に低さがある。さらにイスラム世界から世界に広がる多文字世界の古代から近世・近代期への変遷を知ることができたことは、通時的な歴史研究と密接なつながりがあることは言うまでもない。

③日本と歴史的に最も親近感をもつ、モンゴル、中国の地域研究から、東アジア史と漢字の研究、漢字の変遷と普及について研究した。漢字の語源も多種であり、その影響は、朝鮮をはじめアジアの広範囲に及び、学問、宗教の分野にも著しく影響を及ぼしている。

④古代オリエント史からは、楔形文字やギリシア文字、ローマ字への推移とともに、変化していくリテラシ―の動態について考察をした。文字の保管法、算術 (60 進法) など、当時の知識人が興した文字使用の実態の知ることもできた。文字数が数百・数千もある楔形文字やヒエログリフから二十数文字しかないアルファベット文字が開発されるなかで、行政管理のみならず人間の生存の機微を描く文学が生まれてくるその研究状況は重要性があると考えられる。

⑤日本の教育学の歴史に焦点をあてながら、日本史の中の識字率の研究の実態を考察した。
実態を探っていくと日本の識字率研究は、研究の対象としては歴史がかなり浅いことがわかった。ごく小地域、村単位でのデータから統計学的 (人口、男女比率、職業、身分制度、地形など) に分析すると 3D のようなグラフ化もできるが、完成させるにはかなりの時間と労力が必要となる。

⑥中世ドイツの写本・印刷技術の歴史に焦点をあて、中世文学の写本から文字情報の重要性と通時的な識字率の関係性について考察できた。ドイツの文字文化と当時の社会史との密な関係により伝承から始まり口頭のみで後世に伝えられる形態の口承文学からであることは、ヨーロッパの国々の中でも独創的なものと考えられる。

⑦現代の香港言語と中国全体の状況についての考察は、中国の多民族国家と最大多数の方言を有することで、歴史的背景からの影響は多大である。その中で七台方言の現代の広東語は、学校教育の普及に貢献すると同時に、非識字率も格段に下がることになった。ネイティブな広東語と中国語の違いを生の発音を確認することができたことは貴重な機会であった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計13件（うち査読付論文　9件／うち国際共著　2件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 中川亜希、本村凌二	４．巻 64
２．論文標題 ハドリアヌス帝の属州視察の諸問題	５．発行年 2019年
３．雑誌名 上智史学	６．最初と最後の頁 103-116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 本村凌二	４．巻 6895
２．論文標題 ヨーロッパの神髄 ローマ帝国 ローマ史は人類の縮図 滅亡の歴史に何を学ぶか	５．発行年 2019年
３．雑誌名 週間東洋経済	６．最初と最後の頁 40-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 YUSUKE NAKAMURA, TOMOMI KOZAKI	４．巻 6(1)
２．論文標題 「THE EVOLVING LIFE IMPROVEMENT APPROACH: FROM HOME TAYLORISM TO JICA TSUKUBA, AND BEYOND」	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Psychosociological Issues in Human Resource Management	６．最初と最後の頁 121-159
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 中村雄祐・鈴木親彦（共著）	４．巻 2
２．論文標題 ”Designing Research for Monitoring Humanities-based Interdisciplinary Studies: A Case of Cultural Resources Studies (Bunkashigengaku文化資源学) in Japan	５．発行年 2017年
３．雑誌名 デジタル・ヒューマニティーズ	６．最初と最後の頁 60-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 本村凌二	4．巻 142
2．論文標題 ローマは移民グローバリズムで滅んだ	5．発行年 2016年
3．雑誌名 月刊WiLL	6．最初と最後の頁 40-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中村雄祐	4．巻 14
2．論文標題 平成27年神田祭附け祭り・つくりものプロジェクト報告：2013～2015年（特集　文化資源学を支えるテクノロジー）	5．発行年 2016年
3．雑誌名 文化資源学	6．最初と最後の頁 113-123
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Yusuke Nakamura and Tomomi Kozaki	4．巻 146
2．論文標題 The Evolving Life Improvement Approach: From Home Taylorism to JICA Tsukuba, and Beyond	5．発行年 2017年
3．雑誌名 JICA Research Institute Working Paper	6．最初と最後の頁 1-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 本村凌二	4．巻 9
2．論文標題 ローマ帝国滅亡の真犯人	5．発行年 2015年
3．雑誌名 文藝春秋　SPECIAL　2015　夏	6．最初と最後の頁 42-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 本村凌二	４．巻 54
２．論文標題 ローマ社会におけるパンとサーカス	５．発行年 2016年
３．雑誌名 日伊文化研究	６．最初と最後の頁 2-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 中村雄祐・鈴木親彦（共著）	４．巻 13
２．論文標題 文化資源学の射程：大学院教育プログラムへの人文情報学的アプローチ	５．発行年 2015年
３．雑誌名 文化資源学	６．最初と最後の頁 91－101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 中村雄祐・鈴木親彦（共著）	４．巻 35（Suppl.1）
２．論文標題 ３Dプリンティングによる「ものつくり」とテキストマイニングを活用した、神田祭附け祭り復元プロジェクトの可視化（第43回可視化情報シンポジウム講演論文集）－（オーガナイズドセッションビッグデータと知識の可視化）	５．発行年 2015年
３．雑誌名 可視化情報学会誌	６．最初と最後の頁 47－50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Nakamura Yusuke	４．巻 -
２．論文標題 Reconstructing Provincial Maps	５．発行年 2016年
３．雑誌名 Cartographic Japan-A History in Maps.	６．最初と最後の頁 242-245
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 長谷川岳夫・本村凌二・新保良明・後藤篤子監修	４．巻 4
２．論文標題 ローマ帝国1200年の盛衰史	５．発行年 2014年
３．雑誌名 歴史人別冊　世界史人　ローマ帝国の繁栄と滅亡の真相	６．最初と最後の頁 34-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計11件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 真鍋陸太郎、中村雄祐
２．発表標題 スペイン植民地帝国の文書流通の地理情報の可視化
３．学会等名 地理情報システム学会（第28回学術研究発表大会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 本村凌二
２．発表標題 教養としての世界史
３．学会等名 Keio丸の内シティキャンパス定例講演会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 本村凌二
２．発表標題 ローマ社会におけるエピグロス派とストア派
３．学会等名 日本西洋史学会（記念講演）
４．発表年 2015年

１．発表者名 中村雄祐・鈴木親彦（共同発表）
２．発表標題 「３Dプリンティングによる「ものつくり」とテキストマイニングを活用した、神田祭附け祭り復元プロジェクトの可視化」
３．学会等名 可視化情報学会
４．発表年 2015年

１．発表者名 本村凌二
２．発表標題 神々をあがめる人々
３．学会等名 地中海学会
４．発表年 2014年

１．発表者名 本村凌二
２．発表標題 剣闘士とポンペイ最後の日
３．学会等名 学習院大学史学会
４．発表年 2014年

１．発表者名 本村凌二
２．発表標題 世界史教科書との対話ー東京書籍版『世界史Ｂ』をめぐって
３．学会等名 科研「地域研究に基づく「世界史」教育の実践的研究」研究会
４．発表年 2015年

１．発表者名 本村凌二
２．発表標題 日本の国際戦略と新興国の行動様式
３．学会等名 早稲田大学・国際戦略研究所・総合研究機構
４．発表年 2015年

１．発表者名 鈴木親彦・中村雄祐・増田勝也
２．発表標題 修士論文とシラバスを対象とした人文学・社会科学の学際領域の可視化
３．学会等名 可視化情報学会
４．発表年 2014年

１．発表者名 中村雄祐
２．発表標題 人文系の研究とデジタル技術
３．学会等名 「近代ヒスパニック世界における文書ネットワーク・システムの成立と展開」研究会
４．発表年 2014年

１．発表者名 上野愼也（連携研究者）
２．発表標題 修辞的に読む　古代ギリシアの場合
３．学会等名 日本漢詩文学会第十一回例会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計20件

１．著者名 本村 凌二、滝乃 みわこ、和田ラヂヲ	４．発行年 2019年
２．出版社 ダイヤモンド社	５．総ページ数 184
３．書名 東大名誉教授がおしえる やばい世界史	

１．著者名 本村 凌二、造事務所	４．発行年 2018年
２．出版社 日本経済新聞出版社	５．総ページ数 320
３．書名 ３０の「王」からよむ世界史	

１．著者名 御厨貴、本村凌二	４．発行年 2018年
２．出版社 祥伝社	５．総ページ数 248
３．書名 日本の崩壊	

１．著者名 吉江貴文（編集）・第ＩＶ部：中村雄祐	４．発行年 2019年
２．出版社 悠書館	５．総ページ数 398（327-344）
３．書名 近代ヒスパニック世界と文書ネットワーク・第ＩＶ部：研究者の集合知「近代ヒスパニック世界と文書ネットワーク・システムの成立と展開」研究者の集合知と可視化の試み	

１．著者名 本村　凌二	４．発行年 2017年
２．出版社 講談社	５．総ページ数 400
３．書名 興亡の世界史　地中海世界とローマ帝国	

１．著者名 桜井 万里子、本村 凌二	４．発行年 2017年
２．出版社 筑摩書房	５．総ページ数 224
３．書名 集中講義！　ギリシア・ローマ	

１．著者名 本村 凌二	４．発行年 2018年
２．出版社 宝島社	５．総ページ数 319
３．書名 偉人たちにも黒歴史!?世界史100人の履歴書	

１．著者名 本村凌二	４．発行年 2018年
２．出版社 PHP研究所	５．総ページ数 382
３．書名 教養としての「ローマ史」の読み方	

１．著者名 本村凌二	４．発行年 2016年
２．出版社 祥伝社	５．総ページ数 312
３．書名 ローマ帝国人物列伝	

１．著者名 本村凌二	４．発行年 2016年
２．出版社 中央公論新社	５．総ページ数 268
３．書名 競馬の世界史―サラブレッド誕生から21世紀の凱旋門賞まで	

１．著者名 本村凌二	４．発行年 2016年
２．出版社 大和書房	５．総ページ数 256
３．書名 一冊で丸ごとわかるローマ帝国	

１．著者名 本村凌二	４．発行年 2016年
２．出版社 PHP研究所	５．総ページ数 301
３．書名 教養としての「世界史」の読み方	

１．著者名 本村凌二監修	４．発行年 2017年
２．出版社 講談社	５．総ページ数 384
３．書名 英語で読む高校世界史	

１．著者名 本村凌二（監修）	４．発行年 2016年
２．出版社 理論社	５．総ページ数 299
３．書名 世界の国々と祝日：その国は何を祝っているのか	

１．著者名 本村凌二	４．発行年 2014年
２．出版社 講談社学術文庫	５．総ページ数 224
３．書名 愛欲のローマ史　変貌する社会の底流	

１．著者名 本村凌二	４．発行年 2014年
２．出版社 中公新書	５．総ページ数 225
３．書名 世界史の叡智　悪役・名脇役篇　辣腕、無私、洞察力の51人に学ぶ	

１．著者名 本村凌二	４．発行年 2014年
２．出版社 祥伝社新書	５．総ページ数 312
３．書名 はじめて読む人のローマ史	

１．著者名 本村凌二・渡部昇一	４．発行年 2014年
２．出版社 祥伝社新書	５．総ページ数 312
３．書名 国家の盛衰―3000年の歴史に学ぶ	

１．著者名 中村雄祐（分担執筆）：熊野純彦編・佐藤健二編	４．発行年 2014年
２．出版社 東京大学出版会	５．総ページ数 224
３．書名 人文知３　境界と交流	

１．著者名 中村雄祐（分担執筆）：佐倉統著	４．発行年 2015年
２．出版社 東京大学出版会	５．総ページ数 312
３．書名 人と「機械」をつなぐデザイン	

〔産業財産権〕

〔その他〕

『Voice』福井憲彦氏と対談（賢者は歴史に学ぶ）：「他律」に陥る人類への処方箋）https://www.php.co.jp/magazine/voice/?unique_issue_id=12506
10MTVオピニオン：中村彰氏との対談『ローマ史と江戸史で読み解く国家の盛衰』シリーズ https://10mtv.jp
東京大学学術俯瞰講義：#4「文化資源、文化遺産、世界遺産」、#5「文化資源と情報技術の変化」
UTokyoOpenCourseWare
歴史研究者の集合知の可視化
https://sites.google.com/site/bunteku2013/home/others/09
国立民族学博物館の研究会の成果を材料に歴史文書可視化システムを完成した。データベースへのリンク： http://bunteku.sakura.ne.jp/hisGisMinpaku/
学会発表：発表者名・上野慎也（共立女子大学・連携研究者）
発表課題：「修辞的に読む　古代ギリシアの場合」日本漢詩文学会第十一回例会・2018年
https://www.dropbox.com/s/ggx4seds2z71o3h/20180531nihonkanshibun_su_docx.pdf?dl=0

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	中村　雄祐 (Nakamura Yusuke) (60237443)	東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・教授 (12601)	
研究協力者	木戸口　聡子 (Kidoguchi Satoko)		
連携研究者	上野　慎也 (Ueno Shinya) (60733871)	共立女子大学・文芸学部・教授 (32608)	
連携研究者	中川　亜希 (Nakagawa Aki) (80589044)	上智大学・文学部・准教授 (32621)	
連携研究者	真鍋　陸太郎 (Manabe Rikutaro) (30302780)	東京大学・大学院工学系研究科・助教 (12601)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
連携研究者	中西　麻澄 (Nakanishi Masumi) (90334490)	東京藝術大学・美術学部・非常勤講師 (12606)	
連携研究者	岩城　克洋 (Iwaki Katsuhiro) (70588227)	東京大学・大学院総合文化研究科・特任研究員 (12601)	